

[報告] 記念堂とともに —天野若圓以来 120年—

(第31回歴史地震研究会公開講演会講演録)

濃尾震災記念堂* 西村道代

記念堂の西村道代と申します。本日は、このような席で記念堂をご紹介する機会を頂きまして、ありがとうございます。私は、日頃、記念堂のお掃除や境内の草ひきなどしております、いわば管理人でございますが、記念堂に生まれた者として、幼い時から見聞きしたこと、両親や祖父母から教えられた事柄などを纏めて、本日のお話とさせていただきますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

§1. 濃尾大震災と記念堂の建立

記念堂と申しますのは、明治24年10月28日に起きました濃尾地震、そこで犠牲になられた方々をお祀りしております慰霊堂でございます。

今まで、慰霊碑というものは全国各地で造られて参りましたが、慰霊堂・慰霊施設として本邦初めて、ということで、記念堂は国登録有形文化財という指定を受けております。岐阜県下4千数百名の犠牲者のお名前を記した死亡人台帳や、他にも沢山の資料が伝わっておりまして、それらは現在、岐阜市歴史博物館に納めて、管理をお願いしております。開堂者は天野若圓と申します。私は若圓のひ孫にあたりまして、そのご縁で現在、記念堂の管理をさせて頂いております。

明治の濃尾地震というのは、内陸直下型としては世界でも最大級のマグニチュード8を超える大地震でございました。地面が6メートル隆起し、最大の横ずれは8メートルにも及びました。数字が大きすぎて感覚が掴めませんが、震源地の根尾に参りますと断層を直接見ることの出来る観察館がございます。そこに立ちますと、人間の小ささ、自然の力の凄まじさをひしひしと感じ取ることができます。岐阜県で約5000人、愛知県他で約2000人、合わせて7000人以上の方が亡くなっておられます。当時の人口は現在の約三分の一であったことを考えますと本当に大変な数の犠牲者でございます。又、岐阜県の被害額は判っているだけで、前年度の県の決算額の約150倍という、巨額なものでございました。この二つの数字を並べますと、濃尾地震がいかに壊滅的なものであったかということを知ることができます。

当時の新聞の見出しに「地震が起きれば身の終わり(美濃尾張)」とか、「ギフナクナル」とか、そういったものがございましたが、それには肯かざるを得ませ



講演する西村道代さん

ん。

その当時、若圓は第一回の衆議院議員でございました。愛国協会という政党を率いておりまして、政党の会員数は11万人を超えていました。若圓が愛国協会を設立した翌年に濃尾地震が起きたのでございます。その惨状を目の当たりにして、若圓は心を痛め、亡くなった方を慰霊することが生き残った者のつとめであるとして、記念堂の建立を決意致しました。

当時の政財界の伊藤博文、犬養毅、大隈重信あるいは岐阜県令の小崎利準など沢山の方々の賛同を得まして、記念堂が開堂したのは明治26年10月27日、震災から2年後の3回忌前日のことでした。

これは本当に大変なスピードで、今の私たちから考えるととても信じられない早さでございます。勿論、11万人の会員の方が全国で奔走してくださってお金が集められたということもございますが、結局、その時代・その当時の人々の思い、そして善意が集まってできたものであるということ、覚えていただきたいと思っております。

若圓が亡くなりますと、愛国協会はバラバラになって、そして自然消滅していきます。その間、記念堂をつないでくださったのは、近隣の方々と若圓の妻睦野でございました。

若圓の後を継ぎましたのが若圓の孫にあたります天野眞徹です。私の父でございますが、この人は、記念堂には宗派もなく、檀家さんもない。そういった

* 〒500-8828 岐阜市若宮町2-10

お寺を市井の一個人が維持していくというのは不可能だろう、ということで大変苦慮致しました。

天野眞徹は、実父の中川太、この人は若圓にとりましては娘婿になりますが、その人と一緒に記念堂の維持を祈願して、境内の一角で事業を興しました。幸いにもその事業は成功いたしましたので、そこから得られたものをもとに今の記念堂は維持・管理されております。三つの太陽の陽と書きまして、三陽電機製作所。はじめはネオトランスの製造販売でございました。バス関連機器、ワンマンバスシステム、JR 関連機器と事業は広がってまいります。その事業を興しましたのは昭和 23 年、戦後まだ間もない頃でございました。

§ 2. 往時のこと

私は記念堂に生まれまして、嫁ぎましたので姓は変わっておりますが、私が生まれて物心ついた昭和 30 年代、その頃の記念堂がどんな様子だったかということをお話したいと思っております。その頃の記念堂というのは、まだ籠に薪をくべて、お釜でご飯を炊いておりました。水道はございましたが、境内に井戸も二つほど切っていました。さすがに釣瓶は付いておりませんでした。手押しポンプで水を汲み出しておりました。お天気の良い日にはその前に盥を置いて洗濯板でごしごしやっておりましたし、それから氷を買ってきて氷冷蔵庫で食べ物を冷やす、そういった生活をしておりました。

けれども、昭和 30 年代と申しますのは皆様ご存知のように高度経済成長の年、本当にすべてのものが手作業から電化製品に変わって行ってテレビも普及し、高速道路が整備され、新幹線も通りました。

世の中が目まぐるしく変わる中、記念堂ではゆったりとした時間が流れておりました。実際に震災を体験し、家族を失い、家を失い、財産も失った方々は 70, 80, 90 歳になっても記念堂に通い続けてくださっております。今ではほとんどお見かけしませんが、お腰が 90 度にも曲がった方たちが、乳母車につかまり、杖にすがって、それでも記念堂に通い続けて下さいました。すべてを失った方々にとって記念堂は唯一の心の拠り所だったからでございます。記念堂は宗派がありませんので、毎日のように色々な宗派のお坊様が入り代わり立ち代わり来られて、大そう賑やかでございました。大体一日は午前中の読経から始まります。そしてひとしきり終わりますと、今度は昼食になります。報恩講など大きな行事があるときには婦人会の方々がお齋を作って振舞われることも事もございましたが、ほとんどの日はお弁当を持ってこられたり、近い方はちょっとおうちに帰られたり、誘いあって食事に行かれる方もありました。

そして昼食が終わりますと、今度は、皆さんお昼寝をなさいます。そのお昼寝といえますのは、本堂の片

隅に拍子木を少し大きくしたような棒つきれが沢山積んでございまして、それを枕に、そしてそれは午後のお説教の時にはお腰の下に敷いて、足を楽にするようにして使っておられました。

お説教のある時は外に看板が出ます。「本日、説教あります」。宗派によらず、人気のあるお坊様の時には廊下に人が溢れる程でした。

いまはもうございせんけれども、説教台というものがございました。私の記憶では、高さが大体 1メートルほど、そして 80 センチ四方くらいの台がございました。上には畳が敷いてあり、裏側には引き戸があって、中は物入れになっておりました。取り外しのきく階段のようなものがあり、お説教がないときにはその上に子どもたちが登ったり、中でかくれんぼをしたり、子どもたちも楽しく遊んでおりました。

当時のお説教と申しますのは、こうしたマイクもございせんでしたけれども、私どもが庫裏におりまして、お坊様の凛とした声が響いてきて、それは私としてはいいものだったなと今は思っております。

難しい仏法を卑近な例をひきながら、笑わせながら、しかし厳しく、私のような子どもで意味もわかりませんでした。なんとなく聞き入ってしまうような、そういった魅力のあるお説教でございました。

お説教が終わりますと、もう一休みなさる方もありますが、大体三々五々帰っていかれます。そうやって、お年寄りも子どもも一日、そこでゆったりとした時間を過ごす、そういう場でございました。

§ 3. 記念堂を支えたもの

昭和 40 年代も半ばになりますと、記念堂を心の拠り所にして下さる方々は、お一人またお一人と亡くなられていきました。そして記念堂は一度門を閉じ、月々の法要は非公開となります。しかし、それを補うかのように、境内では天野眞徹の興した事業が少しずつ大きくなっておりました。

今日、記念堂が永らえておりますのは、中川太と天野眞徹の興した会社があったからこそでございます。ここで、記念堂と会社の関係について、お話しておきたいと思っております。

初代社長、中川太は名古屋市に生まれました。私の祖父でございます。若い頃はサラリーマンをしておりましたが終戦の頃は上海で事業をしておりました。昭和 20 年に日本の敗戦が決まり、大陸から沢山の日本人が引き上げてまいります。その時の団長を務めたのが後の日中貿易の岡崎嘉平太氏でございました。太は岡崎氏の右腕となってよく支えましたので、その友情は太が亡くなるまで続きました。太は人様の信用もあり、物事の筋を通す明治の男でございました。

もう一人の創業者、天野眞徹は四人兄弟の末っ子として生まれました。小学校に入りますと母方の姓を継ぐために天野家の養子となり、得度して名を眞徹と

改めます。幼名は中川眞と申しました。幼い頃小児結核を患い、一命はとりとめましたが体の弱い人でした。旧制の岐阜中学に進学しますが、体がいうことをきかず、卒業はできませんでした。教科書以外、参考書や解説書もない時代でございましたが、一念発起、独学で勉強し、専門学校検定試験を突破し、進学を果たします。そして念願のインド哲学を修めることができたのです。

得度をして、インド哲学を修めたものが、何故電気の会社を興すことができたのか。それは眞徹のすぐ上の兄、康平によって、もたらされたものでした。二人は小さい頃から仲の良い兄弟で、いつも一緒に遊んでおりました。長じてからはラジオ作りをしておりました。手先の器用な眞徹の作ったラジオは鳴るのですが、兄康平の作ったラジオは鳴らなかったと父は笑っておりました。康平は太平洋戦争で戦死いたしますが、康平によってもたらされた電気の技術は、天野の手によって三陽電機で花開くこととなります。

中川太は上海で一角の財産を作るのですが、嵐で積荷が海に沈み、全財産を失います。そこで頼ったのが、妻の実家、息子の養子先、記念堂でございました。記念堂は一部を除いて借地でございますが、広くございます。中川一族は、こうして記念堂の中に移り住むこととなりました。眞徹は生活の為、記念堂維持のため、本堂を抵当として資金を捻出し、三陽電機を創業したのでございます。会社が軌道にのるまでは、運転資金工面の為、その後も、記念堂は抵当として出たり入ったりを繰り返す時代でございました。今はもうございませんが、記念堂には戦前、日曜学校として使っていた木造二階建ての建物がございました。日曜学校と申しますのは、子供たちが仏教の基本を学ぶところでございます。その日曜学校が三陽電機の工場でございました。事業が広がり、工場として手狭になり、他に移りますと、その建物は会社の独身寮になりました。こうして、記念堂は三陽電機の黎明期の苦難を共にしたのでございます。

小さな町工場が生き残るためには独自の技術が必要ということで、中川太はいつも「人真似をするな、たとえ落ちていても人のものは拾うな」と喧しく言うておりました。天野眞徹は社員を大切にし、幾度か不況の荒波もございましたが、一人も解雇することなく乗り切ることができたと喜んでおりました。技術を重んじ、研究者を育てましたので、特許も沢山取得することができました。

昭和 61年には日本科学技術連盟からデミング賞を頂きました。これは中々頂くことが難しい賞でございまして、眞徹が社長の時代でございましたが、全社員のご家族にお手紙を出して、大きな目標に向かっていく社員を支えて下さるよう、お願いしました。こうして、全社員とその家族の支えで受賞したデミング賞は、少量多品種の製造業、しかも、大企業系列以外の中

小企業としては、岐阜県で初めて、という快挙でございました。技術の認められた三陽電機は次々と過去最高益を出し、上場の下準備が整います。

思えば、この頃が会社にとっても記念堂にとっても一番良い時期であったと思います。昭和 54 年の本堂屋根の葺き替え工事、区切りの年の法要、平成 3 年には濃尾地震の百年忌も、地域の方々や会社の協力を得て、勤めることができました。岐阜県・岐阜市にもお声をかけ、近隣の人々も参列され、有志の方々による百年の石碑も、建立することができました。これで五十年忌に建てられた石碑と一対になりました。

大仕事を終えた天野眞徹は平成 5 年に亡くなります。けれども、眞徹が亡くなりますと、会社と社員・家族が協力し合う社風は失われ、記念堂維持に協力するという三陽電機創業の精神も、残念ながら残りませんでした。記念堂と天野は次第に会社から遠ざけられ、社名も変わってしまいました。

§ 4. 建物の老朽化と耐震補強

それから 10 年、眞徹の妻令子は一人で記念堂をお守りしてまいりました。私の母でございまして、令子は、昭和 26 年に天野家に嫁いでまいりました。天野といっても、そこは中川一族が大勢住み、境内に町工場のある、そういった場所でもございました。気苦労も多かったと思いますが、舅の中川太に可愛がられたことが励みになったと述懐しておりました。そういう母でございまして、十年間愚痴ひとつ言わず、月々の法要をしておりました。母も年を取りましたので、私が気づいて記念堂の手伝いに通うようになりましたのが平成 15 年のことでございます。

久しぶりの記念堂は、大変荒れておりました。土台は崩れかけ、畳は波打っておりました。これはいけない。私は初めて、心の中で何度も何度もお詫びを申し上げながら、記念堂のお掃除をいたしました。建築士さんにご相談して、三年かけて記念堂の耐震工事を行うことといたしました。それをお引き受けくださったのが横井守建築士です。平成 17 年に第一期の工事が終わり、土台を整え畳も新しくなりますと、本当に清々しい空間が生まれました。この場所を、落成慶賛法要一日だけの公開ではあまりに勿体ないということで、月々の法要に必ず参加する、と横井建築士はお約束してくださいました。今まで、母と私二人だけの法要ではお坊様のご都合で時間も定まらぬことがございましたが、お一人でもこうして参加して下さる方があれば、時間を決めて公開することができます。この工事がきっかけで、記念堂の月々の法要の公開が再開できるはこびとなりました。不思議なもので公開するようになりますとご町内をはじめ、色々な方が来て下さるようになりました。

§ 5. 記念堂を訪れる方々

ある時、一人の紳士が訪ねてこられました。篠田さんと仰います。篠田さんは昭和 10 年代にお祖父様に手を引かれて、毎日のように記念堂に通ってくださったそうです。篠田さんが、遠い道のりを何故こんなに毎日通うのかと思っておられましたら、そのお祖父様は記念堂で知り合った方と再婚なされたそうです。私はそれを聞いて、ああこの記念堂はただ祈るためだけの、それだけの場所ではなかったのだと思いました。実際に震災を体験し、家族を亡くし、家を無くし、全てを失う、そういう思いを共有できる方々がここに集い、祈り、癒され、そして再生されていく、そういう場であったのだと教えていただいたのです。きっと篠田さんだけでなく、沢山の出会いと再生があったことでしょう。

また、今度はご家族で訪ねて下さった方があります。名古屋市に住んでおられる浅井さんという方です。この方のお祖父様が 4 歳の頃は岐阜県の笠松町に住んでおられましたが、そこで被災されたのです。お祖父様の家は全壊し、ご家族は全員亡くなくなりました。たった一人、その 4 歳の坊やが壊れた天窓から這い出して助かりました。浅井さんは、そのお祖父様が生き残ったからこそ現在の自分たちがいる。濃尾震災 120 年を前に、きちんとご先祖の供養をしたいと仰いました。4 歳の坊やですから、ご先祖のことはわかりません。浅井さんは、色々とお調べになりました。役場、図書館、資料館等を訪ね歩いて教えられたのは、公営墓地の中にある一基のお墓でございました。その自然石に刻まれた文字が一文字違っている。本当にこれがご先祖のお墓なのか、悩んでおられました。そして、死亡人台帳を調べるために岐阜に来られましたが、ご先祖のお名前を見つけることは叶いませんでした。けれども、震災で亡くなった方をお祀りしている場所があると聞き、記念堂を訪ねて下さったのです。

浅井さんご家族とお母様と一緒にいました。記念堂に一步入られますと、こんな立派なところにお祀りされていたのかと仰いました。私が、母を記念堂の代表です、と浅井さんのお母様にご紹介しましたところ、浅井さんのお母様が最初になされたことは、なんと、母を拝まれたのです。そうして、母の両手を取って、ほとんど抱き合うようにして、暫くじっとしておられました。驚いたのは私のほうです。お名前も見つからないのに、こんなに喜んでいただけたとは思ってもおりませんでした。勿論、死亡人台帳には全員のお名前が記されているわけではありませんが、私はその時、この記念堂というのは、このようなお名前のない方の為に

こそあるのではないかと思ったほどでございます。

浅井さんはその後、時々記念堂を訪ねて下さるようになり、ある時、死亡人台帳のコピーをパラパラと眺めていらっしやいましたら、ご先祖のお名前があったのです。そして、他のご親戚のお名前も見つかりました。本当によかったと思っております。

§ 6. 未来に向けて

横井建築士とのお約束がきっかけで、毎月の法要の公開が再開できました。平成 20 年からは母に代わって、横井建築士の奥様・加代子さんが本堂の掃除のお手伝いに来て下さいます。数え年 120 年である平成 22 年からは、祥月命日の 10 月 28 日に、法要と行事を行うようになりました。資料を保存していただいている岐阜市歴史博物館のご協力で、記念堂に展示を行い、法要のあとには専門家の先生方の講演会も開かれて多くの方が来て下さいました。

けれども明治 24 年の新聞、「岐阜亡くなる」、先ほどご紹介した見出しでございますが、これを真に受け止められる方は今どれほどいらっしゃるでしょうか。世代をまたぐことで復興どころか、災害の記憶すら薄れています。濃尾地震の名前そのものを知らぬ方々もいらっしやいます。人間にはどうしようもない、起こるべくして起こる自然災害。その記録・思いは後世の為に伝えていく必要がございます。

法要の公開を再開して、今年で 10 年目になります。お集まりくださる方々の作り出す雰囲気は、とても穏やかな心地の良いものです。何事も一人ではかたまりませんが、少しずつ人の輪が広がり、濃尾震災を伝える人が増えてきたことを感謝しております。

こうして、私たちは訪れて下さる方々に色々とお教えいただきながら、支えていただきながら、記念堂がどういったものであるかを、改めて見つめなおしております。被災された第一世代は既になく、その記憶・思いを受け継がれている方も少なくなってきました。本邦初の震災の慰霊堂として、又地域の一人として、歴史や思いを語り継ぐだけではなく、今を生きる私たちの防災意識の醸成をはじめ、未来に向けて何ができるか、何を発信していけるか、皆様のお知恵を拝借できればと考えております。

本日はお忙しいところお運びくださり、感謝申し上げます。今日のためにご協力頂いた皆様、それから先生方に心よりお礼を申し上げて、私のお話は終りとさせていただきます。ありがとうございました。